

| | | | | |
|--|-------------|-----|-------------|-------|
| 書名 | プレーンソング | | 出版年 (西暦) | 1990年 |
| 著者・編者 | 保坂 和志 | 出版社 | 中央公論社 | |
| 学部・研究科 | 農学部 生物生産化学科 | | 学年 | 3年 |
| <p>人に本を推薦しろと言われれば、教訓が得られたり、教養が身に付いたり、でなければ素晴らしいエンタメ性があるものを推すのが筋なのかなと思います。誰でもそんな本が読みたいでしょうし、それにおおよそ本とは読み手を導き、そうでないなら読み手を楽しませるために書かれるのですから。</p> <p>さてこれは私見ですが、そうした目的の下で書かれた小説を楽しむために、私たちは作者と紳士協定を結んでいます。つまり、物語に教導されてエンタメを満喫するために、その物語は一言一句に人が手を入れ、意図に合わせて構築したものなのだななんて考えない。その上で「主人公の境遇は現実問題を突いている」と察し、あるいは空想の中で一服しているのです。</p> <p>この『プレーンソング』が特異なのは、その人為性を悉く排除して見せた点にあります。例えば悲しい出来事のあと涙雨が街を濡らしたり、人物の関係性が現実を鋭く反映したりしない。過去や未来へ物語が収束するわけでもない。そもそも、物語がこの小説には存在しない。</p> <p>主人公の下を訪れる登場人物たちは、皆同じ厚みを持って描かれています。各々が各々の興味を勝手に語り、去っていく。それは単なる野良猫ですら同様です。誰もが等価に存在する場で、何も起こらず、怠惰でも、閉塞しているでもなく、ただ淡々と時間が過ぎる。それは癒しの空間ですらない。</p> <p>この小説に流れる空気は、私たちが過ごしている時間に限りなく近い。私にはそんなふう感じられます。だからこの本を読むときには、ページから目を離し、関係のないこと考え、また目を落とすなんてことができる。そんな風に、小説内の空気と小説を読んでいる場の空気が同期する。その時間こそがこの小説の最大の魅力なのだと思います。</p> <p>皆さんもぜひ一度読んでみてください。これが全然面白くなくて、でも何度となく読み返してしまう。そんな特別な魅力を持った本だと思います。</p> | | | | |